

子どもの描画から社会に結び目づくり（ノットワーキング）する創作活動の実践研究

浅 野 吉 英

A Practical Study on Creative Activities for Knot -
Working with Local Community through Children's
Drawing

Yoshihide Asano

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

子どもの描画から社会に結び目づくり（ノットワーキング）する創作活動の実践研究

A Practical Study on Creative Activities for Knot-Working with Local Community through Children's Drawing

浅野 吉英

Yoshihide Asano

はじめに

子どもたちの造形活動や創作活動を通して地域とのつながりが生まれ、子どもたちの表現や子どもたち自身の思いが地域に伝わっていくことを体験できる実践を研究する。

そのためには子どもたちの造形活動や創作活動を地域に伝える橋渡しの役割が必要となる。子どもたちが学ぶ集団の外側から地域の活動へとつなげる役割である。本実践では、高校生が地域で実践するアートプロジェクトの活動を続けている N 高等学校の授業「今津プロデュース」^{注1)}がその役割をしている。この授業の中で高校生が取り組む「たてじまアートプロジェクト」が、地域の商店街、小学校、M 育成センター、アーティスト、等、のつながりをつくることで可能となった実践である。M 育成センターの子どもたちとの創作盆踊りの実践と創作された盆踊りが地域に披露されてゆくまで(実践Ⅰ)、及び、つながりをつくり続ける西宮地域の子どもと高校生が共同で制作するアートボードを軸としたプロジェクトについての実践(実践Ⅱ)も含め研究する。

子どもたちの造形の魅力や子どもたち自身が思い描く地域の未来の姿を地域社会に住む人々が受け止める機会は限られている。子どもの視点は時に規格外の表現を含んでおり、子どもの規格外の表現を読み解くことはアーティストの新しい価値を含んだ表現を読み解く行為に似ている。そして表現を読み解くプロセスに芸術文化の生成の過程がある。子どもの表現に限らず「見て」「考えて」「問い続ける」営みの中に、私たちが積み上げてきた文化が個別に生成される過程がある。¹⁾

高校生が子どもと共同で創作活動をする意味はそこにあり、子どもたちにとってはあたりまえの表現が高校生によって想像力をかきたてる表現として読み解かれ、高校生の驚きが共同作品として完成したとき、子どもは、自身のあたりまえを芸術文化の視点で受け止めることに近づく体験が生まれる。

本実践は、子どもを主体とした創作実践であるが、同時に創作をプロデュースする側の高校生の学習活動と重なり合っている。この重なりは、活動理論の拡張的学習理論によって教育的な意味を理解することができる。「活動理論は、教育、仕事、コミュニティの各領域において、文化・歴史的に構築されてきた人間の活動システムを人々がどう集団的にデザインし変革してゆくのかを研究する枠組みである。拡張的学習理論とは活動の集団的なデザインと変革への実践的な参加こそが実践者たちの学習プロセスであると見る新しい学習理論である。」¹⁾

現在、地域探究型のカリキュラムを取り入れ始めた高等学校や大学が少なからずあり、地域に点在する市民組織、商店、企業、学校、公的組織、etc.などと学習活動に応じて協働的に活動する仕組みづくりが求められている。高校や大学が教室の外の組織と協働的に学習活動を広げることは、体験を通した対話的で主体的な学びへと発展させる可能性があり、このような教育的潮流を理解するのに活動理論が有効である。

本実践は地域でのアートプロジェクトを高校生が実践するというカリキュラムのもと授業の学習活動が「拡張的学習」²⁾として学校の外へと活動を広げ、地域にある M 育成センターの子どもたちと協働的な創作活動を行った事例である。

授業「今津プロデュース」は以下の理由でつくられた。通常的美術系授業科目では、高校生の表現活動を教室で教員が評価する、という評価システムをとる。これでは、高校生が表現活動に本気になったり、自らの行為でアートが生まれたと実感したり、自身も表現者になれると感じ、再び表現へと向かう可能性の生成が困難である。また、美術が社会で果たす役割もわからない。このジレンマの解決として、高校生が表現したアートを地域の人に見てもらい高校生にフィードバックする仕組みとしてアートプロジェクトの実践をカリキュラムに組み込んだ。地域の商店街のアーケードを使ったアートプロジェクト「たてじまアートプロジェクト」を始めた理由である。アートプロジェクトは、毎年続けると、地域の関係者との接触を生む「コンタクトゾーン」^{注2)}となり、協働的な学びのきっかけとなる関係性を各所に生み出した。

M 育成センターの子どもたちにとって、外部からやってきた高校生や高校の授業の延長上の創作を体験する機会は、どのような成長につながったのか。また、子どもたちの指導者にとって、このような機会をどのような意味があったのかを考察してゆく。

拡張的学習に媒介され子どもの描画・創作実践が生まれた

実践Ⅰ 創作盆踊りの前史

子どもたちは遊びの中に、音楽、踊り、演劇、詩、造形、などを混ぜ合わせている。ハーバード・リードは、「あらゆる遊びの形式は、原始的な種族の儀式におけるダンスと同類のものであり、それらと同じように、詩や演劇の初歩的な形式である、とみなされるものです。そして詩や演劇の初歩

的な形式は、自然に、視覚・造形芸術の初歩的な形式と結びついています。」²⁾ と言う。本実践も遊びの形式に似て、造形・踊りが混ざり合った活動である。子どもたちは、描画活動によって自分が暮らす町の未来への思いを描き、身体表現を創作する。きっかけは「今津プロデュース」の授業の活動で実施していた「たてじまアートプロジェクト 2016」である。兵庫県西宮市甲子園地区で、高校生と地域の子どもたちが共同で創るアートプロジェクトとして 2011 年より始まり 6 年目、毎年続けている子どもと高校生との絵の共同創作だけでなく、地域の文化資源の掘り起こしから創作を手掛けるチームが 2013 年に制作した地元の応援歌で盆踊りを創ろうという企画が上がったのが始まりである。実践は、M 育成センターで土曜日に通う子どもたちとともに行われた。育成センターは、自主学習や季節に応じた行事づくり、室内外の遊び活動を中心に運営されている。

2013 年には、阪神間の海水浴場としてもにぎわった(1965 年まで)甲子園浜の記憶をテーマにした地元応援歌を創作した。地域の記憶を調査する中で、甲子園浜の元網元から話を聞き書きした。1953 年頃まで甲子園浜は海水の汚れもなく地引網漁が盛んに行われ、獲れたカタクチイワシはすぐに浜で加工・天日干しされ、出汁雑魚をつくっていた、という話である。この話をもとに高校生と筆者で歌詞をつくり音楽家の協力を得て地元の応援歌が生まれた。M 育成センターに通う子どもたちも録音場面に参加した。こうして出来上がった地元応援歌が「じびきあみーゴ」である。^{注3)}

南甲子園地区は、高度経済成長時代の 1971 年兵庫県が発表した甲子園浜埋め立計画めぐり南甲子園小学校の PTA が中心となって反対運動の始まり「甲子園浜埋立公害訴訟」裁判によって 2 km の砂浜が守られた歴史を持っている。^{注4)}

このようにして守られた甲子園浜の記憶をきっかけに地元応援歌「じびきあみーゴ」がつくられた。たてじまアートプロジェクトの実行委員長をお願いした新甲子園商店街会長津田泰男(故人)氏が「甲子園浜埋立公害訴訟」原告団団長だったことも地域の掘り起こしをする中でわかったことだった。このような記憶を未来に伝えるものとして「じびきあみーゴ」完成から 3 年後の 2016 年、「じびきあみーゴ」を使った盆踊りを M 育成センターに通う子どもたちと創作したいきさつがある。

実践 I の概要

1) 創作共同体の誕生

「子どもたちによる創作盆踊り」は、2016 年 7 月 9 日、9 月 10 日の午後 1 時から 3 時までの約 2 時間(×2 回)計 4 時間かけて実施した。M 育成センターに通う小学校 1 年生から 3 年生までの児童 16 名、育成センター職員 3 名、N 高校の生徒 4 名、N 高校職員である。プロの演劇制作者の小手川望の進行により行われた。

2) 子どもたちの発想で創る盆踊り

「わたしたちでわたしたちが考えた盆踊りをつくり、たてじまアートまつりで披露する」目標を子どもたちに話し、小手川望が「一人一人の思いやアイデアを生かして作っていく」と宣言する。主体は子どもたちで、ルールは、子どもたちの発想を生かすように高校生、指導者は役割を自覚する。(図1)



図1 子ども・高校生・大人の創作共同体の誕生

小手川望
演劇制作者

3) はじめに理解しておく基礎的なこと ～知ること・体感すること～

(a) 『炭坑節から盆踊りの踊りの仕組みを体感・知る』

夏の盆踊りで最も馴染みのある「炭坑節」を見本で踊り、それを見ながら音楽にあわせて全員で踊る。4つの動作が続いていく構成なのですぐに踊ることができた。



図2 地引網「じびきあみーゴ」の説明、地引網疑似体験

(b) 『甲子園浜の歴史を地引網と地元応援歌「じびきあみーゴ」から体感・知る』

「じびきあみーゴ」をみんなで聴く。歌詞から昔の甲子園浜の様子を想像してみる。漁師さんの話や地引網のことを説明する。地引網で獲れるカタチイワシの実際のサイズ、出汁雑魚などのミホンを見る。ロープを引き合って地引網の疑似体験をする。(図2)

(c) 『甲子園浜の歴史・砂浜を残してくれた祖父母の代の人々の苦労を知る』

甲子園浜は今よりもずっと長く砂浜がつながっていた。浜から海を見ると大阪湾が広がっていた。そこで地引網をしていたこと、夏場は、海水浴場だったこと、沖合の埋立ては止められなかったけれど、今残っている約2kmの甲子園浜は市民活動で守られたことなどを知る。

4) わたしが願う未来の甲子園の町の姿を描き、一人ずつ言葉にして発表する

「わたしが願う未来の甲子園の町の姿」を用意された2m×2mの画用紙にオイルパステルを使って描く。甲子園の町の巨大な白紙の地図である。「子どもは絵をかきながら、自分の想像の世界を描き、独り言を言いながら内言の世界を構築してゆくのである。見たり発見したり創造した



図3 未来の甲子園の町の姿を願いを込めて描く

ことを絵で表現するという表現活動の繰り返しのなかで、自分の考えを深めたりまとめたり蓄積したりしてゆく。」³⁾

こうして自分の内的な想像力を働かせながらこどもたちは未来の甲子園の町のすがたを絵にする。絵は未来の甲子園の地図になった。(図3)

5) 絵に描いたわたしの願いを 4 人～5 人のグループ(高校生・指導者もグループの一員になって)に分かれ、自分の願いを身体の動きで表現する

子どもたちは、高校生に励まされ次第に自信をもって大きな動きになってゆく。なかまの面白い身体の動きに人気が集まり、グループの踊りの形がまとまっていった。(図4)



図4 グループで振り付けを考え発表する

6) グループが考えた体の動きを全員に発表する

こうして子どもたちが最後まで残った踊りの振りは、以下の7つをテーマとした動作である。

- ①「青い海がいつまでもあるといいな」
- ②「その浜辺で地引網をやりたいな」
- ③「魚が泳いでいるといいな」
- ④「カエルもいてほしい」
- ⑤「学校がいつまでもあるといいな」
- ⑥「毎年運動会で走りたいな」
- ⑦「木が大きく育ってほしい」だった。

子どもたちの描く町の未来は、自然環境を大切にしたい未来である。また、町の中心に学校があり、毎年運動会をする。走ったり、ジャンプしたりする動作が入り、創作盆踊りは極めてユニークな踊りとなった。

7) 小手川望がグループの動きを構成し、「じびきあみーゴ」の曲に合わせて踊り完成

子どもたちが発表した動作をほぼ取り入れ、小手川が構成し、3 回各動作を繰り返すことで、前奏を含めた「じびきあみーゴ」の盆踊りが完成した。全員で通して曲に合わせて盆踊りを踊ってみる。3 回の踊りを繰り返すと曲が終わり、歓声が上がった。

8) たてじまアートまつりで創作盆踊りを踊る

子どもたちで創作された盆踊りは、2016 年 10 月に「たてじまアートまつり」で披露され、参加者と共に踊ることができた。当日は、創作盆踊りに参加した子どもたちも多数参加した。参加した子どもたちは、アートまつりの日程を育成センターの指導員の先生に何度も聞いていて楽しみにしていた。盆踊りの振り付けはたてじ



図5 創作盆踊りは、たてじまアートまつりで2016年10月披露された

まアートプロジェクトの HP に今も公開している。(図 5)

実践Ⅱ 子どものあそびイラストを高校生と共同創作し、現実のあそびにする

子どもたちとの協働で取り組む活動に創作アートボードがある。M 育成センターの子どもたちだけでなく西宮市南部エリアの2才から11才までの子どもたちから4月に募集したイラストを高校生がアートボードに拡大・着色・商店街展示する毎年続けてきた活動である。(図6)このアーケード展示には、原画を描いた子どもと両親が鑑賞にやってきて「子どもの絵はそのまま認めてあげればいいのですね。」という感想を持つ両親も多い。

子どもと共同制作されたアートボードの活動が高等学校、商店街、教育委員会、地域の保育園・幼稚園・小学校へとつながりをつくる働きをした。プロジェクトの継続がそれぞれの組織のキーパーソンとの信頼関係をつくった。このようにして形成された関係を基盤にプロジェクトの企画に応じて瞬時に結び合うようにして協働で行われたのが実践Ⅰである。このように瞬時に結び目をつくることを「ノットワーキング」という。³⁾



図6 実践Ⅱの子どもと高校生との共同創作の流れ

て協働で行われたのが実践Ⅰである。このように瞬時に結び目をつくることを「ノットワーキング」という。³⁾

活動理論による実践Ⅰ・Ⅱの考察

実践Ⅰにおいて、子どもたちの盆踊りの創作活動は、甲子園の歴史を知り、未来の町のすがたを描画することで表現テーマが姿を現してきたと言える。別の言い方をすると子どもたちは描画に媒介されて自身が願う町の未来の姿が鮮明になった。(図7)

子どもたちの活動は、学習活動の場を地域に拡張させた高校の授業によってもたらされた。子どもたちの表現は、実践Ⅰの創作盆踊りにおいても実践Ⅱのアートボードの実践においても「規格外」

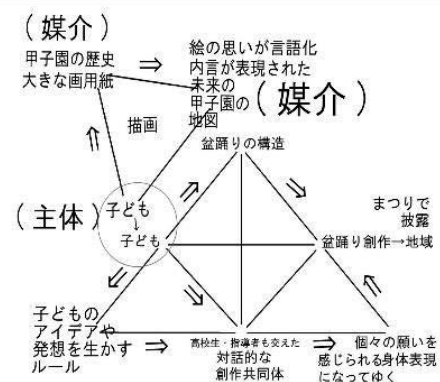


図7 絵に媒介され思いが言語化され
言語に媒介され踊りが生まれる仕組み

の表現要素を持っている。素朴な環境への願いにその場にいた大人たちは皆感動した。このような子どもの表現メッセージは、社会におけるアーティストの役割を担っており、アートプロジェクトがこの表現を地域に伝える橋渡しを

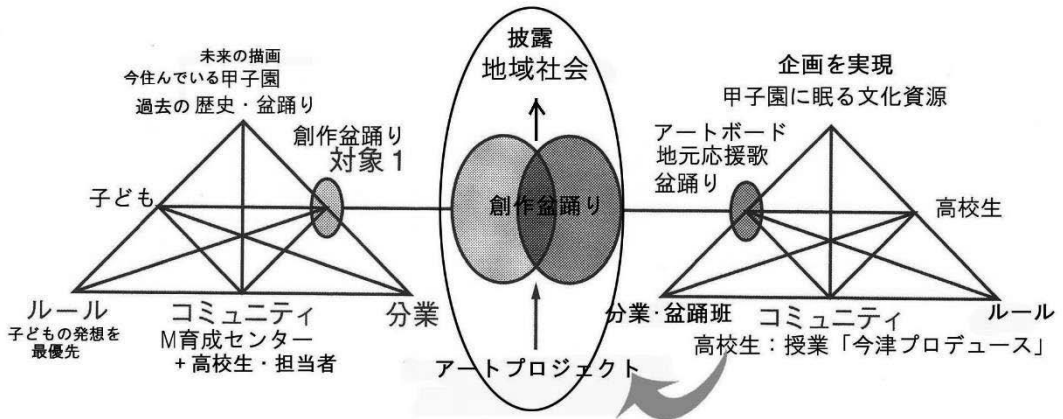


図8 「最小限二つの相互作用する活動システムのモデル」
を元に実践Ⅱの活動の仕組みに改編

している。このことは、協働的な創作活動によって誰もが表現者になりうる創造的な可能性を意味している。

高校の授業から生まれた地域での「アートプロジェクト」が地域の「コンタクトゾーン」となり、盆踊りを創作する企画に M 育成センターの担当者がすぐに応じしてくれる信頼関係を形成していた。子どもたちの創作へと拡張した結果、通常のセンターの活動にない創作活動が生まれ、子どもたちのメッセージが盆踊りという表現となり、2016、2017、2019 年の「アートまつり」で披露され、子どもたちの思いを地域に伝え続けている。この活動の拡がりから実践Ⅰをモデル化したものが図8⁴⁾である

活動理論では、「活動」は人間の社会生活の統合的単位であり、目的や対象に動機づけられた人間の社会的な日常行為の単位である。この概念によって、人々の認知や学習や感情や意志が文化に媒介された「活動」の文脈の中で生起する社会的過程であることが焦点化される。」⁵⁾とあるように、「学習活動も組織やコミュニティの共同活動を通して生起する。」と捉えている。

このような集団的な学習活動の結果、従来の進化に沿って垂直に獲得する能力の発達とは別の水平軸への拡張の中に発達を捉える可能性が探究されている。

実践Ⅰ、実践Ⅱのような、高校生の活動と協働することで子どもたちは異年齢と交わり、「アートまつり」という表現空間へ参加する。子どもたちも高校生も創作盆踊りや共同創作されたアートボードの表現を地域の人々が快く受け入れている姿を実感する。この経験が、子どもたちや高校生の

内面に歴史・文化的な表現文化を自らもつくろうという動機形成につながっているのではないかと予想している。全ての人が創造的な活動で社会を形成できるのではないかと考えている。その根拠は今後の研究に委ねたい。

「たてじまアートプロジェクト」の目的は、アートによる地域のゆるやかな人と人のつながりをつくり、町に眠る文化資源から生み出されるアートを子どもと高校生とが共同で創り、子どもたちや高校生がアート体験を通して豊かに育ってゆく活動を生み出すことである。「拡張的学習は、仕事や組織の実践の中で、人々が現状の矛盾に出会いながら、対象との継続的な対話を進め、活動の新たなツールやモデル、コンセプトやヴィジョンを協働で生み出すことによって、制度的な境界を超えた自らの生活世界や未来を創造してゆくことをいう。」⁶⁾

子どもたちと高校生とは互いに関係が生まれ、協働の創作物は、未来の創造に微力ながらつながっている。けれど組織的な学習・活動として N 高校高等学校、M 育成センター、南甲子園商店街、甲子園の地域社会が、それぞれの動機で独自に活動しながら、重なり合い新たな活動を生み出すような相互作用に至るには、まだ課題を残している。⁵⁾

アートプロジェクトによって子どもたちと高校生とは、共同作品のペアとして出会い作品を共に見て、共に遊びを体験し、ゆるやかな「結び目」をつくる。この「結び目」が地域でいつでも協働で活動ができる絆(信頼感)を生んでいる。「ノットワーキング (Knot-Working:結び目づくり)」を学校と学校、学校と研究機関、学校と保護者・学校外の組織・地域の生産従事者、等との結び目づくりの重要なキーワードとして、複数の活動システム間の柔軟な相互連結や組織間協働のパターンに注目して「ハイブリッドな協働活動」を生成する」⁷⁾という。「ノットワーキング」は双方向的に学習活動の必要性に応じて複雑に絡み合った協働性を生み出してゆく結び目である。このような学習活動が生み出されるのは、生徒や教師の抱える矛盾を出発点としている。ここでは、高校生が美術を学ぶことが美術文化の個々の生成に繋がっていないという矛盾がアートプロジェクトという学びの仕組みへと拡張した。「活動」には、矛盾を受け止め現実を変えたいという主体的な動機が含まれている。商店街には大型店舗に押されて経営を次世代に引き継げない高齢化という課題がある。このように課題を抱えた「地域」を媒介した学習活動には大きな可能性がある。「地域」を媒介とした学びは、美術以外の様々な教科でも、当然子どもたちの学習活動からも今後増えてゆくことが予想される。

まとめ

以上のことから、次のことが言える。

- (1)子どもの創作活動は描画に媒介されて言葉や身体表現を豊かにする。
- (2)子どもの規格外の表現には大切なメッセージがあり、地域をテーマとした子どもの表現には、地

域が受け止める十分な価値を持っている。

(3)アートプロジェクトによる地域とのコンタクトゾーンを形成する仕組みは、地域の結び目をつくる役割(ネットワークキング)を持ち、指導者にとって新たな拡張的学習を生み出す基盤になる。

(4)子どもが社会との接点を持つことは文化に媒介された活動であり、拡張的に創作・表現活動することで、子どもの発達につながり、主体的な活動を生む動機形成につながる可能性がある。

注釈

注 1)「今津プロデュース」は 2009 年 4 月より兵庫県立 M 高等学校総合学科 1 期生の 3 年次美術系学校設定科目として筆者が始めた。1 年間の授業の中で地域におけるアートプロジェクトを高校生が企画・準備・運営・振り返りを行う学習の中で、アートの社会での役割を学ぶカリキュラム編成をし、2011 年より「たてじまアートプロジェクト」に取り組み、現在も継続している。

注 2)山住勝広・ユーリア・エンゲストローム(編).(2008).*ネットワークキング:結び合う人間活動の創造へ*.p25 注釈に「地理的にも歴史的にも分離した人々が互いに接触を始め、関係を生成してゆく空間」とある。

注 3) じびきあみーゴ.そらみみチャンネル Soramimi Channel.

<<https://www.youtube.com/watch?v=Pgc6Kua9Sn0>>(2019 年 10 月 1 日)

注 4) 西宮甲子園浜埋立公害訴訟原告団.(1991).*甲子園浜を守る:イソガニは戦った*.関西図書出版.)より

引用文献

- 1) 山住勝広.(2019).「チェンジラボラトリー」での教師の拡張的学習における矛盾の分析と解決策のモデル化の出現. 日本教育方法学会第 55 回大会資料.
- 2) ハーバード・リード. (2001). *芸術による教育*. フィルムアート社. (p.134).
- 3) 東山明・東山直美.(1999). *子どもの絵は何を語るか*. NHKbooks. (p.192).
- 4) 山住勝広・ユーリア・エンゲストローム(編). (2008). *ネットワークキング:結び合う人間活動の創造へ*.新曜社. (p.20).
- 5) 山住勝広. (2009). *活動理論と教育実践の創造:拡張的学習へ*(4 刷). 関西大学出版部. (p.74)
- 6) 山住勝広/ユーリア・エンゲストローム. (2008). *ネットワークキング: 結び合う人間活動の創造へ*. 新曜社. (p.28).
- 7) 山住勝広. (2016). *ネットワークキングによる学習*. 活動理論学会. 「活動理論研究」, 1.

参考文献

- フィリップ・ヤノワイン. (2015). *学力をのばす美術鑑賞*. 淡交社.
- ユーリア・エンゲストローム. (2017). *拡張による学習：活動理論からのアプローチ*(13 刷). 新曜社.
- 山住勝広・ユーリア・エンゲストローム(編). (2008). *ネットワーク：結び合う人間活動の創造へ*. 新曜社
- 山住勝広・ユーリア・エンゲストローム(編). (2008). *ネットワーク：結び合う人間活動の創造へ*. 新曜社 p20 の図を元になっている。
- 山住勝広. (2017). *拡張する学校：協同学習の活動理論*. 東京大学出版会.